

# 緒 言

紀要編集委員会

1990年代には教養課程大綱化という大きな大学改革があり、それから一連の大学改革のスクラップ・アンド・ビルドが継続してきた。尚綱学院大学も四年制大学化、男女共学化、総合人間科学系大学としての確立など、一連の大幅な改組を経験した。これらは大学制度が社会の要請を反映したものでなければならない、あるいは18歳人口の減少を見越す必要性、という大きな社会的要因によって矢継ぎ早になされてきたものである。しかしながら、ふと気づいてみれば、尚綱という私立学校のアイデンティティが、いつの間にか消滅しかかっているのではないかという危惧を覚えるまでに至った。

私立学校はその建学の精神によって立つものである。我が尚綱学院はまさにキリスト教こそが建学の精神であり、またわれらを導く理念でもある。キリスト教精神による教育が尚綱の根本的原理である。当委員会は再びそこに立ち返って自己の意義を確認することが必要であろうと考え、これまでに尚綱のキリスト教教育に深く関わり、心より尚綱学院を愛してこられた諸先生方に、執筆を依頼した。

ここに幸い6名の執筆者のご協力をいただき、各々の経験と識見から尚綱とキリスト教を論じていただくことができた。当委員会として、心よりなる感謝を表するものである。キリスト者であるなしを問わず、同じ理念のもとに今後の尚綱学院大学の教育を推進していく立場の者にとり、この特集の記事が我々に更なる使命の自覚を促し、教育の推進に資することを信ずるものである。

## 尚綱とキリスト教

学長 合 田 隆 史

尚綱とキリスト教について考えるとき、尚綱の歴史の中で重要な3つの時期に、尚綱がどのような道を選んだかを振り返っておくことは十分意味のあることだろう。その3つの時期とは、尚綱女学会として歩み始めた1892年頃、各種学校としての認可を得た1899年から高等女学校相当施設としての指定を受けた1910年頃、そして戦時下の1940年前後の時期である。その上で、尚綱のキリスト教主義教育の当面する現在と将来について考えてみたい。

### 1. 1892（明治25）年、尚綱創立の頃

尚綱学院は、1892（明治25）年8月（一説には9月）の創立とされており、今年で129年目を迎える。この校名は、本学関係者には周知のように、朱子によって儒教の代表的經典とされた四書の一つ『中庸』の一節「衣錦尚綱」から採られたものだが、そもそもなぜわざわざ儒教の經典から校名を採ったのだろうか。

当時、仙台では、1886年創立の仙台神学校（91年に東北学院と改称）、宮城女学校が活動を

始め、87年には第二高等中学校（のちの第二高等学校、東北大学）、93年には仙台女学校（現在の仙台白百合学園）、94年には仙台数学院（現在の東北高等学校）、97年には仙台市高等女学校（現在の宮城第一高等学校）が設立されている。「尚綱」の名称が異彩を放っているのがよくわかる。

この理由を考えるには、前提として当時の時代背景を思い起こす必要がある。1887年、欧化主義政策を主導した井上外務大臣の辞任と共に世にいう鹿鳴館時代が終わり、キリスト教学校にとっては国粹主義の逆風が吹き始める。1989年大日本帝国憲法制定、90年教育勅語発布、91年にはいわゆる内村鑑三不敬事件が起きる。同年には東北神学校が東北学院と改名、94年には札幌のスミス女学校が北星女学校と、東京では東京英和学校が、「英和」という字句に対する批判から青山学院（青山は同学校所在地の町名）と改名している。

このようなことから、本学の自校学習用資料である『尚綱学入門』では、「当時キリスト教教育を行うことはできたが、校名にキリスト教関係の名前を付けることは許されなかった。したがって、地名や建学の精神・思想を表す漢文等から選ぶほかなかったのである」としている。

しかしながら、このことは、キリスト教女子寄宿学校とか（当時尚綱は英語では、Christian Girls' School Homeと呼ばれていた）、ミード女学会といったキリスト教を連想させる名称を付けることができなかった理由とはいえようが、あえて中国の古典に典拠を求めた理由としては十分でない。当時宮城女学校はすでに存在していたが、先述のように仙台女学校の創立は尚綱創立の翌年の93年、キリスト教学校ではないが94年には仙台数学院が設立されており、青山学院のように町名を冠する選択肢も含めれば、いろいろな可能性はあったはずである。

尚綱の校名を提案したとされる久保寺豊太郎は、ミードの日本語教師であり、のちに女学会の教師も務めた人物である。彼は当初、『論語』の「克己復礼」から『復礼女学会』を提案したが、ふくよかな体形であったミード宣教師が、「ふくれ」というのは語呂が面白くないとして却下した、というエピソードが残っている。推測になるが、校名を検討する過程のどこかの段階で、地名などではなく、当時の日本人が伝統的に大切にしてきた思想や価値観を表す章句から名称をとるという方向性が、関係者の間で共有されたものと思われる。だとすれば、やむなく儒教の経典から採ったというよりも、むしろキリスト教主義の教育が日本の伝統的な価値観と矛盾対立するものではなく、尚綱の教育は積極的にそれらの両立をめざすというメッセージを込めたものという見方もできるのではなかろうか。

この校名を決定したのはミード宣教師であり、初代校長アニー・ブゼルが尚綱に赴任したのはその年の11月である。ブゼルは赴任後この校名の由来を聞き、これはキリスト教の精神にも通じると言って、ペトロの手紙一3章3、4節を示したと伝えられている。したがって、彼女自身は尚綱女学会の校名決定のプロセスには加わっていないと思われるが、ブゼルにおいてもやはり、キリスト教の精神に立ちつつ日本の文化や価値観を尊重し、両者の共生を实践しようとする姿勢は一貫していたと思われる。

ブゼルは、後に遠野に活動の場を移すに当たり「私が目指したのはできるだけ人々と同じようになるために人々の間に住まうことであった。それは何らかの方法で私がキリストを知らせ、キリスト教が恐ろしいものでなく望ましい信仰であることを知らせるためであった」と述べている。それは、当時の宣教師の一部に見られた「先進国からきて、土着民を指導する」態度とは、明らかに一線を画するものであった。他方で、ブゼルは、「住民の一人として人々と一緒に生活することで彼らの信仰を理解し尊重すること」を決心したと述べているが、これはあく

まで「地の塩」としての使命感を前提としたうえでの理解であり尊重である点で、いわゆるキリスト教の「土着化」とも異なっている。

この共生の精神は、ブゼルのバイブルクラスで学んだ大正デモクラシーの旗手たちにも、1919年以降仙台でブゼルの跡を継いだ第2代校長メリー・ジェッシーにも、また1927年尚綱を去り久慈に移住して活動したタマシン・アレン（後にアレン国際短期大学学長となる）にも、それぞれの個性に見合った多様な姿で引き継がれていく。

## 2. 1899（明治32）年、尚綱設立認可の頃

さて、国粹主義、排外思想が強まる中、尚綱にとって試練の時代はさらに続く。この時期の卒業生数をみると、1895年から99年までの5年間で合計わずか7名、特に聖書科は98年に2名の卒業生があったのみであとはゼロという時代が続いていた。そのような中、1899年にいわゆる文部省訓令第十二号（一般ノ教育ヲシテ宗教外ニ特立セシムルノ件）が発せられる。「一般ノ教育ヲシテ宗教外ニ特立セシムルハ学政上最必要トス 依テ官立公立学校及学科課程ニ関シ法令ノ規定アル学校ニ於テハ、課程外タリトモ、宗教上ノ教育ヲ施シ又ハ宗教上ノ儀式ヲ行フコトヲ許ササルヘシ」というものである。私立学校も含め、かつ課外活動においても、正規の学校におけるあらゆる宗教教育や儀式を禁止するという、広範かつ徹底したものであった。文言から明らかなようにキリスト教学校だけを対象としたものではないが、この訓令の主たる関心はキリスト教学校にあったと思われる。

ブゼルをはじめ正規の高等女学校としての認可を目前にしていた尚綱女学会のメンバーは、極めて困難な状況に直面することとなった。正規の学校として認可を得るためにはキリスト教教育をやめなければならず、キリスト教教育を継続するためには「各種学校」となるしかない。それは、卒業しても上級学校への進学資格が得られず、したがって学生募集が極めて困難になることを意味した。認可申請自体を取りやめるということも、現実的な選択肢として十分ありえたであろう。しかし、1899年11月、尚綱は、高等女学校に準じる教育を行う各種学校として、高等女学校令ではなく私立学校令に基づき認可を受けることとなった。

このような状況の中で、キリスト教学校は、青山学院や立教中学などを中心に訓令の撤廃を求めて動くが、当面まずは上級学校への進学資格などの特例の獲得を目指した。これが功を奏し、1901年5月には、訓令自体の撤廃ではないが、一定の条件を満たす学校について特例として上級学校への進学資格や徴兵猶予を認める制度が実現した。このときの協力がきっかけとなって、後にキリスト教学校教育同盟が結成される。

尚綱がこの制度により、専門学校進学に当たって高等女学校と同等、と認められる学校としての指定を受けたのは、1910年1月であった。関係者の喜びは大きく、仙台市長はじめ内外から百数十名が集まって祝意を表したという。

こうして、尚綱は女子神学校を目指すことを断念（1909年聖書科廃止）、聖書の授業やキリスト教教育活動は課外活動となり、キリスト教精神に基づく一般的な高等女学校（厳密にはそれに準ずる学校）としての歩みを始めることとなった。

## 3. 1940年一皇紀二千六百年前後の頃

その後の尚綱は、大正デモクラシーの東の間の「小春日和」のような時代を経て、1930年代前半の経営危機をなんとか乗り切ること成功するが、日中戦争の拡大とともに、キリスト

教学校にとっては再び厳しい冬の時代がやってくる。『根づいた花』の著者である R. スティブンス宣教師は、この間の尚綱について次のように述べている。

「尚綱はこれまでも、どんな国策にも忠実な学校として知られてきた。宣教師たちもそれを認めてきた。彼女たちは日本の国民に好感を持ち、国家神道の祭祀王としてではなく、国家の首長としての天皇を尊敬していた。」

さて、1940年8月になって県当局から各学校長に対し、次の3点の要請があった。

- (1) 礼拝その他の集会の前に全員が国旗に敬礼、国歌斉唱、宮城遥拝を行なうこと。
- (2) 未だ天皇の写真を奉載していない学校はそれをなすべきこと。従わない場合は法的に罰せられる。
- (3) 聖書を教えることは差し支えないが、正規の学科として教えるてはならない。

これを文部省訓令第十二号と比較すると、課外活動に限定しているとはいえ、礼拝やキリスト教教育を禁止していない点では、一見緩やかな要請のようにも見える。しかし、翌年には日米開戦となり、宣教師たちは帰国を余儀なくされ、尚綱では礼拝も聖書の授業もなくなり、讃美歌や宗教音楽も禁止された。教員が次々と応召し、学生たちは勤労働員に駆り立てられ、授業の継続すら次第に困難となっていく。

そんな中でも、エラ・オー・パトリックホームでは細々ながら日曜学校が続けられ、学生寮では、夕拝という形で賛美と祈りの時が密かに守られていたという。また、年2回の校内リサイタルや、テノールの藤原義江、バイオリンの辻久子など当代一流の演奏家を招いた演奏会を開き、授業でも時局に沿う歌の間に西洋古典の名曲を取り入れるなど、音楽の伝統を守ろうとする努力も続けられたという。

日本のプロテスタント諸教派は、国策に沿って日本基督教団として合同し、次第に政府の戦争遂行に積極的に協力するようになっていった。多くの教会では、毎週日曜に皇居遥拝をし、必勝祈祷会を守り、戦費調達のために献金を行った。

この間尚綱の校長を務めたのは、高橋重人（在任期間1938年4月～1949年2月）であった。県当局から天皇皇后の写真を校内の目立つ場所に置くよう指示された彼は、校長室に扉のついた奉安庫を作り、そこに写真をしまっておいたという。あるいは音楽教師や女学生たちの密かな抵抗を黙認することが、彼としてできる限界だったのかもしれない。

戦後彼は、唯々諸々と当局に妥協したと批判され、校長を辞任することとなる。

#### 4. 2020年

以上のように、キリスト教主義の学校としての尚綱は、過去幾度も試練の時期を経験してきた。その都度尚綱は、基本的には日本の文化や社会の在り方を尊重しつつ、しかしそれぞれの時代に即した形で、尚綱なりの方法で、粘り強くキリスト教の精神を守り続けてきたということができよう。もうひとつ見落としてはならないことは、キリスト教学校としての尚綱が向き合ってきたのは、その時々や国家や当局の圧力とともに、その背後にあるそれぞれの時代の社会の風圧であったということである。

この社会的な圧力への対応が極めて難しいのは、学校はその「社会」から学生を集め、その「社会」へと学生を送り出していかなければならないところにある。この風圧に対抗するためには、単にそれを無視しようとし、あるいは受け身を守るのではなく、その時代を生き抜くあり方を模索し、社会に対して自ら提示していかなければならない。その意味では、尚綱の校名

は、尚綱のその伝統（あるいは宿命といった方がいいのかもしれない）をも象徴しているといえよう。

さて、新型コロナウイルス感染症禍のさ中にある今日、尚綱のキリスト教教育は今の時代とどう向き合い、何を守ろうとしているのか。

2019年7月2日、東北学院大学で、「企業と大学における人材育成指標の共有について」というテーマの会合が行われた。産学共同で大学教育における成果を測る指標を開発し、大学はそれに沿って学生の能力向上を図る、企業はその指標を採用や研修、昇進等に用いる、という枠組みの構築を目指そうというものである。「企業、大学それぞれの指標についての情報の共有」という意味かと思ったが、やはり「指標の共有」であった。

これは、文部科学省の補助事業である「地（知）の拠点形成事業」として採択された「みやぎCOC+」事業で進められている「地域高度人材指標」に関するもので、もちろん大学教育全般についての話ではない。また、文部科学省から実施を求められているものではなく、「みやぎCOC+」独自の提案である。「みやぎCOC+」事業には、東北学院大学をハブとして、尚綱を含め在仙の国公私立大学が参画している。

本学がこれに参加したのは、補助金の確保が目的ではない。実際、補助金は本学にはほとんど流れてきていない。もちろん、文部科学省から有形無形の圧力を受けているわけでもない。大学が連携して地域貢献に取り組むという趣旨に総論的に賛同したこと、尚綱の社会的プレゼンスとして、このコンソーシアムに尚綱の名前がないというわけにはいかないということ、さらには、この事業で何が進められようとしているかの情報を得ておき、動くべき時に出遅れないようにしておくことが、本学の学生のためにも有益であるといった点を考慮したものである。

文部科学省が補助金を配っている以上、そこには一定の政策的意図があるのは当然であろう。この日の会合のテーマは、その意図に沿ったものであったに違いない。しかしここで重要なことは、このコンソーシアムに参加したうえで、大学側から積極的にあるべき姿を提案していくことである。では、何を提案するのだろうか。本稿のテーマとの関連でいえば、尚綱学院大学として、守らなければならないキリスト教主義の教育、その育成指標はどうあるべきなのか。さらに言えば、キリスト教主義の学校としての今日的存在意義について、我々はどこまで真剣に考えてきただろうか。

本学の初代学長渡部治雄は、キリスト教自体を教育の主な内容とする「キリスト教教育」と区別し、「教育一般を主眼とし、キリスト教の諸原理を基調とした教育」を「キリスト教主義教育」と呼んでいる。そして、本学は、「キリスト教の精神に基づいて人格を磨き、豊かな人格を育て、人間としての品格を高める教育」つまりキリスト教主義の人格教育を教育の重要な柱としていること、この人格教育は、人格教育を直接の目的としない教科教育と課外活動等の教科外活動を含む本学の「教育のあらゆる場で」専ら「間接的な方法によって」行われるべきものであることを指摘している。

残念ながら、率直に言って、今日的な環境の下でこの理想を、教育課程全体を通じて内実化するということは、極めて困難な課題であると言わざるを得ない。しかし、キリスト教主義の教育は本学の建学の精神の中核であり、尚綱がこれまでその存立をかけて守り続けてきたものである。現在の感染症対策に伴う新たな教育システムの運用に一区切りついた段階で、宗教主任や宗教部長とも相談し、改めて全学的な検討の場を設けられればと思っている。

このような重要なテーマについて考える機会を与えていただいた紀要編集委員会に謝意を表

するとともに、今回の紀要の特集が、大学としてのキリスト教教育再構築に向けた一つの重要な端緒となることを期待している。

### <参考文献>

- 今井誠二他（2020）『尚綱学入門』2020年度版、尚綱学院大学出版会  
大島良雄（1997）『日本につくした宣教師たち』ヨルダン社  
影山礼子（2015）『ブゼル先生とバイブルクラスの学生たち－近代日本の人間形成』関東学院大学出版会  
川端純四郎（2016）『教会と戦争』新教出版社  
学校法人東北学院（2017）『東北学院の歴史』河北新報出版センター  
栗原基（1940）『ブゼル先生伝』ブゼル先生記念事業期成会  
小林孝男（2015）『主の御旨のみが実現する』尚綱総研出版会  
宍戸朗大（1995）『バプテスト派の初期伝道誌 東北伝道とバイブルウーマンの活動』耕風社  
尚綱女学院100年史編集委員会（2002）『尚綱女学院100年史』  
スティブンス、R.L.（2003）『根づいた花－メリー・D・ジェッシーと尚綱女学院』キリスト新聞社出版事業部  
隅谷三喜男（1968）『日本の社会思想』東京大学出版会  
田澤晴子（2006）『吉野作造－人世に逆境はない』ミネルヴァ書房  
目黒安子（2012）『みちのくの道の先』教文館  
私の山形物語出版委員会（2015）『私の山形物語 渡部治雄のあしあと』  
一般社団法人キリスト教学校教育同盟ホームページ <https://www.k-doumei.or.jp/>

## 愛の神はまどろむことなく－尚綱学院とキリスト教

元尚綱学院宗教主任 小林孝男

### 1. 歴史を遡る

明治12年（1879）、盛岡の正教会の一人の信徒が横浜に赴き、たまたま横浜浸礼教会の礼拝に出席した際に、バプテストの宣教師N.ブラウンが日本語に翻訳した聖書と出会った。あえて大袈裟に表現すれば、この出会いこそが、やがて尚綱学院が誕生するに至るための序章であった。

この正教会信徒は盛岡に戻り何人かの信仰の仲間と共に、持ち帰った聖書を熱心に読み始める。当時の正教会は漢語訳聖書を用いていたが、その聖書を読むことができるのは、十分な教育を受け漢文読解の素養を身に着けた限られた者だけであった。それに対しN.ブラウン訳聖書は、だれでもが読めるように全て平仮名が使用され、訳も分かり易さを大切にしていた。彼らはその聖書を読む中、今まで十分に知ることができなかった聖書の中身に目が開かれ、次第に正教会から離れ別の信仰共同体を形成したいと願うようになった。そのために横浜に幾度か手紙を書き送り、宣教師の派遣を求めたのである。そしてその要請に応えたのが、バプテスト派宣教師T.P.ポートであった。

明治13年（1880）1月、ポートは横浜から函館行きの船に乗り、寄港地寒風沢で下船、塩釜からは陸路を辿り盛岡に赴き、盛岡浸礼教会を設立することになる。こうしてバプテスト派による東北伝道が開始された。当時、外国人は居留地以外に住むことを許されていなかったため、ポートは内地旅行の特別なパスポートをその都度申請し、不便な長旅を繰り返しながら、